

MACF 礼拝説教要旨

2024年10月6日

「罪との戦いと鍛錬への忍耐」

ヘブル 12章 3-13

3 あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。

4 あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。

5 また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。

主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。

6 なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」

7 あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか。

8 もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。

9 更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。

10 肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。

11 およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。

12 だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。

13 また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

1) 罪と戦うという姿勢と生き方

聖書で罪という言葉が用いられる時、それは犯罪という意味よりもむしろ「的外れ」という内容が強いです。もちろんその中に犯罪的な要素もあります。しかし根源的には「神様の意図している思いに対して反抗的、あえて的外を外すような生き方をする」という問題が指摘されています。

神様への反抗心や反発、神様が持つておられる水準や基準に対する反発、それが罪です。

そういう思いがあったら「神様を喜ぶ」ことができません。神様を「礼拝する気持ち」にもなれません。

聖書の言葉も反発ばかり感じてしまって、喜んで受け止めたり、その線にそって生き方を考えたりすることが苦手になってきます。

そこにあるのは「自分中心」「自分のエゴ」でしょう。

自分の人生なのだから誰にも文句を言わせず、神様にも介入を許さず、自分で決断し、自分の良いと思えることだけを追求するという生き方になってしまいます。そこには、ちょっと難しい「和解」とか「矯正」とかを望む気持ちは育ちません。

ヘブライ人への手紙の記者は「自分の中にある神様への反抗心やわがままな生き方」ときちんと向き合って、神様の思いに合わせる努力が必要だと勧めるのです。そのためにこそ「イエス様の生き方」に注目すべきことが教えられています。イエス様は、この地上での生涯の初めから終わりまで「罪との戦い」の連続でした。

最も深刻な誘惑は「十字架から降りてこい」というものだったと思います。十字架から降りてくれば苦しみから解放されるし、自由にもなれるではないか、という誘惑。

しかし、それは「救い主である事の否定」に繋がります。

イエス様は耐えました。

2) 楽しい生き方ばかりではない

神様の思いに心を向けていくという生き方は決して楽なことばかりではありません。それは訓練とか鍛錬とか言われる要素を含んでいるからです。自分を律する心とか、神様にお任せする心などが育てられなければなりません。

宗教的な雰囲気をも身につければそれで良いかといえば、そんなことはありません。それらは実生活の中で大いに具体化されなければ意味がないからです。

つまり、教会での礼拝にいる時の態度と表情と月曜日からの生活で見せる態度と表情の間に大きなギャップがあっては意味がないのです。

修道とか修練とか言われますが、ある事柄が身につけていくためには、意識的に習慣化されなければなりません。ただ、聖霊は聖書の言葉を通して、私たちの態度や立ち居振る舞いについて心の中に信号灯のような役割を果たしてください。

それは神様の喜ぶことなのか、そうでないのか、聖霊ご自身が心の中に赤や青の信号をともってください。ただ、それを見分ける感覚を身につける必要があります。

静まる時間、聖書を思い巡らす時間、そしてこれらは鍛錬として与えられている必須事項として学び、味わうことが重要です。

キリストの喜びが自分にとっての喜びとなるような生き方のために、私たちは何がキリストにとっての喜びなのか知らねばなりません。聖書との向き合いは、そのために必須なのです。人生における選択が、なんでもイエスではないし、なんでもノーでもありません。キリストの思いに心を向けることが重要です。

イエス様の生き方にしっかり目を向け、心を向けることが重要です。

これは、決して「律法主義とか掟主義」に戻れということではありません。何がなんでも「こうすべきだ」というものではなく、むしろ神様の愛に対する応答として「喜びを心に味わいながら従う」のです。

律法主義は私たちの心に喜びや平安や他者への祝福の心を育ててはくれません。イエス様に対する自発的な心による応答、喜びの応答こそ訓練と鍛錬とによってもたらされるものなのです。それはイエス様とより近く生きるという訓練でもあるからです。

3) 義・平和・癒し・さまざまな実

そういう生き方を継続していると、さまざまな実がみえることを私たちは経験することになります。

「神様に赦されている感覚」「神様との平和が保持されている感覚」「神様に愛されている感覚」「心が潤されている感覚」そして「人に対してもっと優しくになりたいという欲求」などが芽生えてきます。つまり、自己中心的な生き方が少しずつ変えられて「神様を大切にする生き方」へと変化してくるのです。

そういうことを土台にしてフランチェスコの祈りを読むと納得できます。

*

『平和を奏でる楽器に』

神様 私をあなたの平和を奏でる楽器にしてください

憎しみのあるところに愛を撒き 傷を負ったところに ゆるしを

不調和のあるところに ハーモニーを 疑いにさいなまれるところに 信仰を

間違っているところに真実を 絶望のあるところに希望を

悲しみのあるところに喜びを 暗い闇の中に光を

もたらず者にしてください

おお 全能で唯一の神様 私の願いを叶えてください

私が慰めることをしないまま 自分が慰められることを求めないように

私が理解しようとしないうまま 自分を理解してほしいと思わないように

自分が本当に愛しているかを顧みずに 自分を愛して欲しいと求めないように

なぜなら

与えることの中でこそ私たちは受け ゆるすことで私たちは赦され

死の真っ只中でこそ永遠に続く命に生まれるのですから

---アッシジのフランチェスコ

(訳：櫻井純子)

MACF 礼拝映像はこちらです

https://youtu.be/d_uhKJhK_RM